

風土記の丘の花だより³⁰⁹

今、そしてこれから見られる植物(2026年2月21日)

先日、テレビで「早春譜」という歌を聴きました。「春は名のみの風の寒さや」なんて、まさに今の季節の歌ですね。今回は何とか花を見つけようと頑張りました。そして「顕微鏡サイズ」とまではいかずとも、「虫めがねサイズ」の花を見つけたので、4つ紹介します。



この白い花はミチタネツケバナです。日本にはもともとタネツケバナというのがあるが、それに対して、道ばたに普通に生えるということで、頭に「ミチ」が付きました。ヨーロッパ辺りからの外来植物で、よく見かけるタネツケバナのほとんどが本種です。詳しく観察すると、茎に毛がほとんど生えていないのがミチ方です。また、茎の根元にたくさんの葉が付いていることも特徴の一つです。アブラナ科の植物です。風土記の丘にはタネツケバナも少し生えていますよ。



キュウリグサの花です。やっと咲き始めたところとみえて花茎も全然伸びていません。もっと暖かくなると、花茎をひょろひょろと伸ばして、たくさんの花を付けます。色は薄い水色できれいな花です。でも、余りにも小さいですね。直径2ミリほどです。名前のおり葉や茎を揉むとキュウリのような臭いがします。ある観察会で一人の女性が「キュウリもみを、ギュっと絞った時の臭い」と表現されました。「言い得て妙！」まさにその臭いだと思いました。



続いて小さな花です。名前にも「小」が付きます。コハコベです。ハコベは春の七草の4番目「はこべら」のことです。写真の花はまだ開ききっていません。開くと小さな花びらが10枚あるように見えるのですが、一枚一枚がV字型の花びらなので10枚に見えますが、じつは5枚なのです。ハコベには何種類かあって、風土記の丘では、他に茎まで緑色のミドリハコベ、これらより大きめのウシハコベが見られます。子どもの頃は、飼っていたニワトリのえさとして、よくハコベを摘みに行きました。



さらに小さな花です。フラサバソウです。オオイヌノフグリに似ていますが、大きさはその花の半分もないし、色もそんなに鮮やかな青色ではありません。聞き慣れない名前ですが、昔の植物学者フランシェとサバティエのフラとサバをくっつけてこんな名前を付けたそうです。かといって、珍しい草ではなく、むしろ（少なくとも我が家では）厄介な雑草と化しています。茎を伸ばし、どんどん増え、盛り上がるほどにはびこります。今回は小さな花ばかりで、見つけるのが大

変でしょうが、見つけたら、ちょっと嬉しい春の予感を感じられるかも知れませんね。 松下